

# 秋水通信

第25号

2018. 12. 3

幸徳秋水を顕彰する会  
四万十市右山五月町 8-22  
四万十市立中央公民館  
TEL0880-36-2778 (田中)

HP:<http://www.shuusui.com/>  
mail:[zen-tanaka@heart.ocn.ne.jp](mailto:zen-tanaka@heart.ocn.ne.jp)

## 大逆事件サミット in 新宮

十月六日、和歌山県新宮市で第四回大逆事件サミットが開かれた。

同サミットは二〇一一年十月、本市で幸徳秋水刑死百周年記念事業の一環として開いたのが最初で、以降、第二回二〇一四年十月、福岡県豊津（みやこ町）、第三回二〇一六年十月、大阪府で開催。

今回は、今年一月、熊野地方の大逆事件犠牲者六人の一人、医師の大石誠之助が新宮市名誉市民に選ばれたという、ベストタイミングでの開催となった。

地元も盛り上がりを見せ、会場の市立福祉センターは二五〇人という大入り。当顕彰会会員も高知県からの七名を含め全国から多数参加した。

冒頭、山泉進明治大学名誉教授（大逆事件の真実をあきらかにする会事務局長）があいさつ。この二年の間に、安倍政権によって共謀罪法が強行施行された。大逆事件はまさに共謀罪によってつくられ

たもの。人権弾圧のない社会をめざすことがサミットの目的であり、この運動の輪をさらに広げていくことが重要、と。

続いて、地元フオークグループ「わがらーず」による歌「風の記憶―大逆事件犠牲者の顕彰に向けて―」が披露された。「あなたの求めた自由の風は、いまこの国に吹いていますか」

基調講演は、伊藤和則・国際啄木学会理事による「石川啄木と大逆事件」。

啄木は東京朝日新聞社校正係の時、事件に異常なほどの関心をもち、短歌の同人平出修介護士を通して事件の本質に迫っていく。事件関連の詩歌、評論等も多く書き残した。死ぬ一年半は事件に没入した。

地元報告は、上田勝之新宮市会議員と辻本雄一佐藤春夫記念館長から大石誠之助名誉市民実現にいたる経過について。大逆事件百年の二〇一〇年から翌年に



サミット会場



自由・平等・博愛の木柱建立



木柱前で全員撮影

かけて名誉市民への取り組みを行ったが、「請願」が市議会の賛成を得るに至らず、いったん頓挫した。

しかし、地道な運動を継続した結果、二〇一七年十二月議会で条例改正による「議員提案」が可決された。そして今年一月二十四日大石刑死の日に遺族（甥西村伊作の孫立花利根氏）に名誉市民証が授与された。

次に、全国七団体から活動報告。当顕彰会は宮本博行会長がおこなった。最後に大逆事件サミット連絡会議として「新宮宣言」を採択。閉会挨拶は地元二幸通夫・「大逆事件」の犠牲者を顕彰する会会長。二次会交流会も同会場で。

翌日、熊野地方犠牲者六人顕彰碑「志を継ぐ」の隣に新たに大石名誉市民実現と今回サミットを記念する木柱「自由・平等・博愛」を建立・除幕。

あと希望者は、地元の案内を受けて、市営南谷墓地にある三名の墓（大石、高木顕明、峯尾節堂）を弔い、さらに佐藤春夫記念館で開催中の大石名誉市民記念展示や、今年市内にオープンした「熊野・新宮 大逆事件資料室」の見学をした。次回（第五回）サミットは二年後を目途に神戸で開くことになりそう。

## 安岡良亮・雄吉 未公開資料展示中

安岡良亮は中村の勤王志士で秋水の親戚（母多治の従兄）。

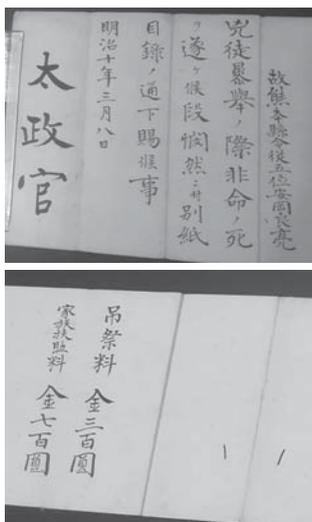
維新東征に参加後、新政府に登用されたが、明治九年、初代熊本県令（知事）の時、不平士族の神風連の乱で斬られ殉職。

のちに秋水が「自分の親戚の出世頭は安岡伯父であった」と嘆いたように、良亮の死は一族に大きな影響を与えた。（前号「中村町人文化と幸徳秋水」参照）

雄吉は良亮長男でのち代議士に。弟に秋水幼なじみの秀夫（時事新報主筆）がいる。

このほど横浜市在住の安岡家子孫（雄吉ひ孫）から当顕彰会に良亮、雄吉の任官辞令書、大隈重信、尾崎弔堂からの書簡等、これまで未公開の資料三十点が預けられ、四万十市に寄託手続き中。

このうち三点を、現在市立中央公民館で開催中の志国高知幕末維新博しまんと特別企画展（二〇一九年一月三十一日まで）に展示している。ぜひ、ごらんください。



安岡良亮熊本殉職弔慰金下賜

# 秋水を支えた幸徳駒太郎

尾崎清

幸徳駒太郎の墓は中村の正福寺の秋水の墓の隣にある。

駒太郎は大川筋の久保川村の農家長尾家の三男として生まれた。幸徳家との縁は秋水の伯父篤道(克作)が久保川村の庄屋をしていて、十六歳でその下僕になることになって生じた。利発な駒太郎、以後終始篤道に仕えている。

篤道は幕末維新期に名を残した勤王の志士で漢学者でもあった安岡良亮の高弟で、それだけに行政志向が強く、商家俵屋を秋水の父である弟篤明に譲り、自身は中村町老役や庄屋として藩行政の末端畑を歩み、のちに士族に推されている。

篤明の死後まもなく篤道は、俵屋を継いだ幼い秋水の後見人となり、俵屋の広い敷地内に居を移すと共に、子のなかつた篤道は秋水の兄亀治を養子にした。

この時、駒太郎も篤道につき従って初めて俵屋内に入り、篤道に仕えながらも俵屋の家業にも従事するようになった。

俵屋の広い敷地内に篤道が居を構えたことで、幸徳家は本家篤道家と分家秋水家が共存するかなり複雑な構成になり、

このような環境の中で秋水は育った。

商才のあった駒太郎は見込まれて、まだ幼かった秋水の「中継養子」に十九歳でなり、秋水の母多治を助けながら誠実に働き、俵屋の大黒柱になっていく。

秋水が成長すると駒太郎は一旦長尾姓に戻るが、俵屋の営業はその手に委任されている。また、篤道が隠居し、秋水の兄亀治がその家督を継ぐと、駒太郎は篤道の「廃家予備養子」となり、再び幸徳姓を名乗るようになった。

篤道は秋水の長姉で歳の近かった民野の婿に駒太郎を迎えるつもりだったが、駒太郎は強く固辞し隣村入野の柿内小金と一緒に戻った。この辺りにも俵屋を担いながら自らは奉公人の地位に甘んじた駒太郎の人柄が滲んでいる。駒太郎の頑張りによって、俵屋は家業の業種業と酒造業のみならず後には金物業まで営んだが、その繁栄は秋水をしかと支えていた。

幼少年期は勿論のこと、秋水は新聞記者として独り立ちするまで家からの仕送りを受けていたが、駒太郎からの仕送りを受けていたようなものだった。

さらに秋水は萬朝報を退社し、平民社を起こしてからは、絶えず経済的苦境に直面しながら活動せざるを得なかったが、駒太郎の支えは大きかったろう。

最晩年には収入源として唯一あてにしていた原稿料も稼げなくなっていたから、よく知られている小泉三申の援助のほか駒太郎にも頼っていたろう。

最後には積もり積もった罰金が払えないので、土地と家屋敷を手放したいと駒太郎宛の手紙で訴えている。

駒太郎は金銭面で秋水を支えていただけではない。多治は明治四十三年十一月上京し、獄舎の秋水と最後の対面をしたが、この時駒太郎も同行介添えしているし、秋水の刑死後まもなく駒太郎は再び上京

し、堺利彦が預かっていた遺骨を中村に持ち帰った。

駒太郎が催した秋水の葬儀に、棺はできるだけ小さくし夜になって出すこと、参会者は親類以外まかりならぬ等、官憲は著しく干渉したが、気骨のある駒太郎は毅然として葬儀を執り行った。

秋水の妻千代子はその優れた著書「風々雨々」の中でこう書いている。

「この苦難期(秋水の父篤明は秋水二歳で亡くなった)に母を助けて幸徳家のために尽くした者は、秋水の父の死と共に、番頭から引き揚げられた養子の駒太郎である。駒太郎は幸徳家の養子になってからも、自ら奉公人の地位に甘んじて終始した人である。小さいながらも立志伝中の人である駒太郎こそは、幸徳家を語る上で忘れることが出来ない人であると共に、確かに恩人と呼ばれて然るべき人である。秋水は意志の強いこの駒太郎を批評して、若し駒太郎に充分の学問があつたなら、必ず星亨以上の人物になつたろうと言っていた。」

星亨うんぬん「はともかく、駒太郎を評して誠に的確なものである。」

幸徳家にしよつちゅう出入りしていたというから駒太郎をよく知っていただろう秋水の従妹岡崎てるも、その「行届きたる奉仕は、真に非凡の人なり」と感心し、秋水自身も「此人の奉仕により後顧の憂いなく飛躍できた」と語っている。

駒太郎の人柄は、息子の富治が「善良で温厚な人だった」と書き残している。

頭の切れる番頭が主家を乗っ取るというような話は、昔も今もよく聞くことだが、駒太郎は真逆で、少年時代より幸徳家と俵屋のために粉骨砕身尽くしぬいた。

しかも早くから俵屋の大黒柱になったにもかかわらず、自らは奉公人の地位に甘んじて一生を過ごしたのである。

こういう人は滅多にいない。世の片隅で生涯を送ったとは言え、誠に稀な人物と言えるだろう。

幸徳駒太郎は、秋水刑死後二年目の大正二年に五十八歳で亡くなっている。

## 駒太郎ひ孫幸徳正夫氏 長尾家(駒太郎生家)墓参

戸籍によれば駒太郎は安政二年九月八日、久保川村農家長尾平作、ミキの三男として生まれ、明治十五年六月二十八日、二十八歳の時、幸徳篤道と養子縁組をしている。

長尾家はいまも同地(現四万十市久保川)にあり、現当主正記氏(駒太郎兄林太郎ひ孫)が健在であることが、このほどわかった。東京の幸徳正夫氏に連絡をしたところ、長らく両家の行き来は途絶えていたようので(父の故正三氏からは何もきいてなかった)、すぐに長尾家墓のお参りをしたいと九月十六日帰省された。

初対面のお二人は同じ血筋だけあって、よく似ておられた。しかも、同学年(昭和十七年度)であることがわかった。当頭彰会宮本会長、尾崎副会長、田中も立ち会い。

正記氏は先祖が幸徳家と縁があつたことは伝えているが、駒太郎墓も秋も参りしたことがないということで、前もってご案内をした。

両家の親戚付き合いが復活したことをともに喜びたい。



駒太郎、秋水墓



幸徳正夫夫妻と長尾正記氏

# 秋水墓参メッセーじ

秋水墓に置いてあるノートへの記録(二〇一七年)を抜粋紹介します。

## 秋水が生まれたまち歩き

十一月十一日(日)、顕彰会主催で「秋水が生まれたまち歩き」を行いました。

一般市民を主な対象とし、秋水研究会十一月例会、四万十市文化祭参加事業(市広報告知、助成あり)として行ったもので、今回で三回目。三十名参加(東京二名)。

今年「土佐の小京都」と言われる一條家がつくった中村のまちなかを二時間半かけて歩きました。

コースは、一條神社↓小姓町↓一條房基供養墓↓幸徳秋水、坂本清馬墓↓樋口真吉生家跡↓安岡良亮邸跡↓木戸明邸(遊焉義塾)↓行余館跡↓奉行所跡↓紺屋町↓玉姫墓↓中ノ丁↓遠近鶴鳴生家跡↓秋水生家跡↓京町。

幸徳家とも縁の深い(氏子)一條神社では川村公彦宮司から詳しい説明を受けました。その他は、顕彰会役員が説明。一般市民も参加しやすい行事として定着してきましたので、来年以降も趣向を変えながら継続したいと思います。

## ご案内

### ■幸徳秋水刑死

108周年墓前祭

日時 2019年1月24日(木)  
午後0時30分〜1時過ぎ  
場所 四万十市中村 正福寺

### ■記念講演会

時間 午後2時30分〜4時  
場所 四万十市立中央公民館  
3階研修室

### ■講師

奥村正男  
(京都丹波岩崎革也研究会)

### ■演題

岩崎革也と幸徳秋水

### ■大逆事件処刑

108回追悼集会

日時 2019年1月26日(土)  
午後1時〜  
場所 東京都渋谷区 正春寺  
主催 大逆事件の真実をあきらか  
にする会



○念願の秋水先生の墓並びに絶筆碑に参ることができ感謝しています。世の中がまた平和と反する方向に進んでおり、憂慮しています。(神奈川男性)

○全く来るつもりがなかったのに、幸徳秋水先生の墓があると知って、訪ねてみました。もっと知らなければならぬ方だと思いました。(東京男性)

○数年ぶりに来させて頂きました。平和を祈りつつ、感謝いたします。主の恵み、とこしえまで。アーメン。(大阪女性)

○百数十年たった今でもあなたのお考えに共鳴いたします。お参り出来て本当に良かったです。(熊本男性)

○今まさに本場に戦争ができる国につくり変えようとしてあります。幸徳秋水の平和、博愛の精神を今こそ見直される時でしょう。(兵庫男性)

○顕彰活動に敬意を表します。今また時代があつたように物言えぬ体制に戻りつつあるようです。それを防ぐために、私もできるかぎりの事をするつもりです。(徳島男性)

○約三十年ぶりに参りました。以前は労組の旗などが沢山ありました。時節柄意味多き方です。(香川男性)

○孫たち全八人の旅。パンフレットカンパします。(大阪男性)

○小生、新聞記者として四十数年。秋水先生はジャーナリストとして大先輩です。あの困難な時代に自由平等主義を貫き通したその魂には畏敬するばかりです。権力に屈せず、義を以て世に問う。そう決心する、改めて思いを強くいたしました。(東京男性)

○戦争遺跡保存全国ネット高知大会に参加し、こちらに寄せていただきました。反戦運動の先輩に墓参できうれしく思います。(東京男女)

○社会科の教員をしております。かねてより念願の幸徳先生の墓参ができ感無量です。きな臭いこの頃、非暴力、政界平和への実践を改めて進めていきたいと感じました。(愛知女性)

○最近、また先生と出会いました。今日もそうです。その一つです。(大阪女性)

○亡くなった父親が一度お参りに行きたいといつておりました。(大阪男性)

○明治時代のリベラル派というのには本場に敬服します。まだまだ江戸時代の名残り強い中、どれほどの知識と見識があつたのか想像もできませんが、先駆者に脱帽します。(千葉男女)

○当時の重要人であった秋水がこのように観光名所となっていることに戸惑いを感じます。冤罪の象徴的人物に心から冥福をお祈りいたします。(東京男性)

○秋水「帝国主義論」に感嘆。現代が秋水の時代と似通ってきたように思っています。(東京男性)

○新宮の隣町から来ました。亀島のすぐ近くに住んでいます。(三重女性)

○建国記念日という偽善、ヤマトの出たらの日に中村まで来れて良かったです。(岩手男性)

○先生のお墓がこのように大事にされていると初めて知りました。旅の途中で偶然通りかかった者ですが、お参りできてよかったです。(愛知女性)

○万緑の中、静かにおまいりしました。森近運平、その縁想いながら。近隣の津山には平沼騏一郎の墓もあります。ホトトギスの声聞きながら、しばし想っていたしております。(岡山男女)

○やっと訪れることが出来ました。新潟上越市、平出修新婚の家保存会の会員です。(千葉男女)



一條神社

# 陽水と秋水——その系譜 田中 全

井上若水（ワカミ）は南方ブウゲンビル島で敗戦の日を迎えた。

京城（ソウル）で齒科医をしていた時、衛生兵として出征。飢えと病気の地獄の島で、かろうじて生き延びた。

京城に残っていた妻フジは娘京子連れて実家のある福岡県直方市に引き揚げ。若水も遅れて合流、無事を喜び合った。

若水は高知県幡多郡佐賀で明治四十一年、父廣之助、母小竹の八人の子の長男として生まれた。

井上家は港町佐賀で旅館を兼ねた商売をしていた。同じ佐賀の三宅家から養子として入った祖父魯吉は仕事熱心で繁華な家であった。

魯吉が廣之助の嫁に三宅からもらったのが三宅助太郎、喜代の二女小竹である。細面のかわいい娘であった。

小竹には姉小八重がおり、山崎半次郎と一緒に生きていた。

半次郎は下田の豪商平田屋の生まれだったが、家を飛び出し、佐賀に来ていた。

下田は四万十川河口から流域の木材、木炭等を京阪神などに積み出す港町として栄えていた。

嘉永四年の記録では、下田には藩の用に命ぜられた船（御用船）が十四艘あり、土佐の港の中で最も多かった（二位野根十一、三位下ノ茅八―「中村市史」）。

平田屋は下田で一番の廻船問屋で、幕府測量隊伊能忠敬も泊めた。

山崎半次郎の父弁次郎は分家で、平田屋十一代介三郎の弟であった。平田屋は中村の商人との取引が多かった。その一つが薬種問屋の俵屋（幸徳）であった。俵屋は古くからの中村商人であったが、

江戸享保年間、商売つながりで堺から迎えた幸徳篤胤（初代俵屋嘉平次）に暖簾を預けた。

幸徳三代目篤親の弟（分家）に篤昌（俵屋藤兵衛）がいた。

山崎弁次郎は商売の縁で篤昌の娘よしを嫁に迎えた。弁治郎、よしの間に生まれた三男が佐賀に飛び出した半次郎であった。こうして中村の幸徳家と佐賀の三宅家、井上家が親戚になった。

さて、幸徳篤親の次男が篤明（四代）、その次男が伝次郎（五代）。伝次郎はのちに秋水の号をもつ。

よしと篤明はいとこ、山崎半次郎と伝次郎はまたいとこになる。

さらに秋水の姉の寅（牧子）は同じ中村の商人谷川恒雄に嫁いでいたが、子は娘武雄（たけを）一人で、婿養子を迎えることになった。選ばれたのが佐賀の三宅で、小竹の弟（三男）仲次郎である。

三宅仲次郎は大正七年、武雄と結婚し谷川仲次郎になった。すぐに娘君代が生まれた。しかし、夫婦仲がうまくいかず、翌年離婚。仲次郎は佐賀に戻った。

話をもとに戻す。

齒科医井上若水の父廣之助は佐賀の家を継いだだが、人はいいが、商売向きではなかった。家業は次第に行き詰る。ついに昭和九年頃、一家を挙げ神戸に出た。出奔同然であった。若水二十五歳の頃である。

一家は神戸でいろんな仕事につき支えがあった。若水は齒科院で働いた。学校には行かず、独学で技術を身につけた。さらに京城に渡り、修行を重ね、齒科医の資格をとった。しかし、やつと独立とい



井上廣之助、若水墓

うところで衛生兵として陸軍にとられた。

復員後は、直方の隣糸田町（田川郡）で齒科院を開業した。

母小竹は昭和十六年、妹小春も十九年、神戸で没。父廣之助や弟、妹たちは田川に迎えたが、父も二十二年喉頭がんで亡くした。

悲しみの中にあつた若水に、翌二十三年、待望の長男が生まれた。名を陽水（アキミ）とつけた。

若水と陽水。秋水と似た名である。秋水も「アキミ」と読める。

そんなことから、陽水の名前は、秋水を慕っていた祖父の気持ちにくんだ若水がつけたもの、祖父は秋水が死刑になったので土佐がいやになり外へ出た、というような話が結構流布している（歌手武田鉄矢など）。

しかし、廣之助は秋水の影響を受けるようなタイプであつたようには思えないし、何より神戸へ出たのは家業破綻によるものであり、しかも昭和九年頃のことであるから、秋水刑死（明治四十四年）からずつと後である。

若水は息子の名に同じ水をつけた。ではなぜ、祖父廣之助は父に珍しい若水と名付けたのか。

実は、若水の名付け親は別にいた。廣之助姉竹野の夫千谷林三郎である。林三郎は明治十一年、幡多郡入野村生まれで、

当時地方法務局登記官であつた。

敬虔なクリスチャンで、内村鑑三の本を愛読していた。

若水が生まれた明治四十一年二月といえば、秋水が中村に最後の帰郷をしていた時期に重なる。

当時三十歳の真面目な林三郎は秋水から刺激を受けたのかもしれない。秋水は入野で講演をしたこともあるので、聞いたかも。しかし、裏付けるものはない。

陽水は父を継ぐべく齒科大をめざしたが、失敗。親の期待を裏切り、好きな音楽の道に進んだ。

最初、アンドレ・カンドレの名でデビューしたが、さっぱり。

昭和四十七年三月、本名の井上陽水（ヨウスイと呼ばせた）の名で再デビュー。曲は「人生が二度あれば」であつた。

父は今年二月で六十五歳のシワは増えてゆくばかり

若水は若くして佐賀を離れざるをえなかつたかやしさがあがり、いつか故郷に錦を飾りたいという思いをもっていた。

同年、佐賀には齒科院がなかつたので、当時の町長から強い要請を受け、念願の里帰りを果たし、開院準備中であつた。

しかし、六月、突然倒れた。享年六十五。陽水の歌は父の鎮魂歌になつてしまった。

若水は佐賀の荒神山、井上家累代墓の廣之助夫婦の隣に葬られた。

父の思いがわかつているのか陽水はたびたび墓参りに帰つて来ている。里帰りコンサートもノーギャラで開いたことも。

佐賀の親戚が若い陽水を秋水墓に連れていったことがあると証言している。

しかし、陽水は秋水については語らない。名前の由来も含め、心の内を覗きたい。〈参考文献〉田中全「陽水と秋水」『土佐史談』二六九号 二〇一八年十一月